被表彰者・団体の略歴及び主な功績

芸術文化分野：森田　尾山（もりた　びざん）

古澤宕邨氏の書道塾への入門を機に 10 歳から書の道を歩み、日本を代表する書家である村上三島氏や栗原蘆水氏を師に研鑽を重ね、剛柔併せ持つ独創性豊かな書作で地域書道界を牽引してきた。昭和 61 年以降日展での入選歴は 16 回を数え、会友として活躍するほか、平成 3 年に日本書芸院展大賞、同年及び翌 4 年に読売書法展特選、平成 14 年に読売書法展読売新聞社賞、同 18 年には日本書芸院展史邑賞を受賞するなど、中央書壇においても優れた実績を残している。

昭和 45 年に創立した書道グループ「伯耆書院」では、50 年以上の長きにわたって後進の指導育成に尽力し、鳥取県美術展覧会や全国規模の公募展の入選者等を数多く輩出してきた。会員の作品展「伯耆書院展」では、郷土ゆかりの文学や唱歌、温泉地など地域に根差した身近な題材をテーマに取り上げ、書の豊かな魅力を伝えている。

さらに、「伯耆書院展」における作品制作を契機として、令和 2 年には地域に点在する郷土文人の文学碑を調査した書籍『西伯耆の石ぶみを訪ねて』、同 6 年には鳥取県西部地区を舞台とする民謡・小唄等を研究した冊子『ふるさとの謡』を発刊するなど、書活動から発展した貴重な郷土研究の成果を広く地域に還元している。また、地元サッカーチームとのパートナーシップによるスローガン揮毫や応援書道展の開催、地域の文人や写真家・画家等と連携した美術展の企画開催、郷土の作曲家である永井幸次氏の唱歌を活かした地域振興活動など、異分野とのコラボレーションワークにも精力的に取り組むほか、ＮＰＯ法人と連携して障がいを持つ人々の書を通じた交流や自己表現を支援するなど、書道を介して活力あふれる地域社会の創造に大きく貢献している。

こうした優れた活動に加え、米子市教育文化事業団理事や鳥取県書道連合会副会長、鳥取県美術展覧会等の運営委員・審査員を歴任するなど、幅広く文化振興に貢献した功績が高く評価され、令和 7 年 2 月には鳥取県文化功労賞を受賞した。本県の芸術文化の振興発展に果たした功績は極めて顕著であり、引き続き地域文化の発展を牽引し、次代へ繋げる役割が期待されている。

文化財分野：山下　健（やました　たけし）

昭和 48 年の大因州製紙協業組合入社後、昭和 52 年まで地元の伝統産業である和紙製造に従事し、並行して昭和 48 年から 51 年にかけ、民芸運動の創始者柳宗悦の甥で、高名な染織家である柳悦孝・柳悦博両氏の工房で染織および紙布（しふ）の技術を学んだ。昭和 52 年に本格的に染織家への道を歩み始め、同年の日本民藝館展への出品を皮切りに、国展工芸部への出品を重ねた。昭和 51 年には国展 50 周年記念賞を受賞し、以後 14 回の入選を数える。その後、平成 7 年に国画会会友、平成 11 年に第 73 回国展工芸部会友優作賞受賞を経て、平成 13 年には国画会会員に推挙されるなど、その活動は高く評価されてきた。平成 31 年には鳥取県指定無形文化財「染織」および「紙布」の保持者に認定され、令和 4 年 11 月 16 日には鳥取県教育委員会表彰を受賞。鳥取県を代表する工芸家としての地位を確立している。

山下氏は、植物染料と化学染料の双方を扱い、多様な機織り技術を駆使して、布質・デザインともに優れた作品を世に送り出してきた。その作風は、伝統的な絣（かすり）織と板締（いたじめ）染を基盤としながらも、立涌（たてわく）模様を斜行させるアレンジや、文様の重層的な繰り返しなど、独自のモダンな模様世界を構築している。さらに、明色と淡色・暗色、寒色と暖色を巧みに組み合わせることで、非常に幅広く豊かな色彩展開を見せる点に大きな特徴がある。

また、生まれ故郷である青谷町の特産物、和紙を用いた「紙布」の魅力を探求し、染織界へ提示し続けてきた。師である柳兄弟の「同じものができなければ、本物ではない」という教えに忠実に、糸作りから染め、織りに至るすべての工程を自身の責任において一貫して手がけている。染織家としての深い経験と卓越した技術に基づき、和紙の吟味による適切な素材選択と、高度な紙の糸づくりと機織りの技術を総合することで、紙の糸ならではの繊細で暖かな風合いを持つ独自の紙布を制作してきた。

こうした真摯な姿勢と成果により、所属する国画会において重要な位置を占めるだけでなく、鳥取県内、さらには現代日本の染織界における第一人者として高く評価されている。